

特集

トップ
インタビュー

こころ豊かに 住みやすい村づくり



TOP
Interview

三島村長 大山 辰夫

今回は、子供からお年寄りまでみんなと一緒に楽しむ元氣村を目指している三島村の大山辰夫村長に島の魅力や村の取り組みについて、お話を伺った。

**適切な医療サービスを受
できる保健医療提供体制の
整備・充実**

—三島村における健康に暮らせるまちづくりへのビジョンについてお聞かせください

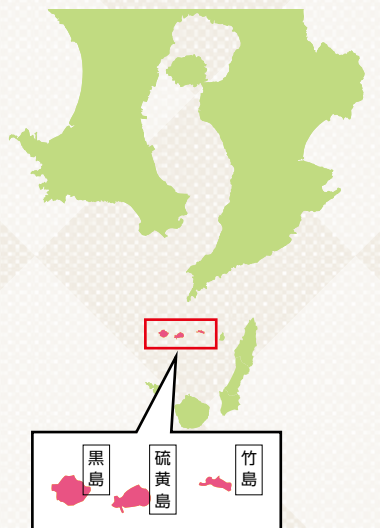
三島村は、竹島、硫黄島、黒島の3島からなり4つの集落があります。最も人口の少ない竹島地区53人から最も人口の多い硫黄島地区131人まで合わせて361人（令和5年9月末現在）と、県内で最も人口の少ない自治体です。

交通機関は、週4便の村営船「フエリーみしま（1859トン）」が三島各島と鹿児島市を結ぶ唯一の航路で、ほとんどの人や物資の輸送手段

となっています。

こうした、人口の少ない小規模離島の三島村では、投資効果が分散されるなど厳しい自然環境、経済的環境に置かれており、本庁舎を域外の鹿児島市に置かざるを得ない状況となっています。

全国的に少子高齢化が進行していますが、三島村の人口も年々減少しており、直近2020年の国勢調査人口は405人でした。国立社会保障・人口問題研究所の地域別将来推計人口では、村の人口は296人まで落ち込むとされ、村が存続し、発展していくための人口の将来展望として、2025年に400人の目標を掲げ、移住定住施策を村政の最重要課題として取り組みを進めています。現状、中々、人口増に転じてはいませんが、平成27年から令和2年人口減少率は3・1%の減少に留まっており、令和2年の高齢化率は26・4%となっています。これは、全国平均（28・6%）を2・2ポイント、県平均（32・5%）



を6・1ポイント下回る結果となっております。

健康づくりの施策としては、地域の健康管理や健康の保持増進を図るため、「健康かごしま21」、「みしま村健康増進計画」等に基づき、地域特性を生かした各種保健活動による疾病の予防、早期発見など包括的な対策を進めています。

三島村の医療機関は、村内4集落にそれぞれへき地診療所があります。常駐医師はおらず、看護師（2人体制）のみの常駐となっております。鹿児島赤十字病院から医師1人が派遣され月に2回各診療所を巡回して診療を行っており、小児医療については、鹿児島市立病院に依頼して、対象乳幼児のいる集落で年4回診療を実施しています。

こうした中、三島村では公設でネットワーク回線を敷設しており、情報インフラの設備が整備されています。この整備されたインフラを活用して住民の安心安全を考えオンライン診療の実現に向けて検討を行っているところ。離島の医療環境が少しでも改善されるのであればとの思いから、国からの支援も受けつつ進めていきたいと考えています。人口増に向けた移住定住もですが、島にいて子供たち

が病気をしたり怪我をしたりした際、大丈夫なのかということが真っ先に言われますが、「大丈夫です」と言えるためにも環境整備は重要だと思っております。

健康づくりを支えるために、特定健診、長寿健診を行っています。常駐医師のいない診療所の体制では、レントゲンなど大型の医療機器は整備・運用が難しいことから、かごしま県民総合保健センターの支援により年1回、フェリーの特別ダイヤを編成し、全住民を対象とした五大がん検診（肺がん・胃がん・大腸がん・乳がん・子宮頸がん）を行い病気の予防、早期発見に努めています。

今後も村は、へき地医療拠点病院をはじめとする医療機関等が実施する医師派遣や巡回診療を支援することにより、地域住民が等しく適切な医療サービスを享受できるように保健医療提供体制の整備・充実を図り、また、社会福祉協議会等による自主的な地域福祉活動に対する取り組みを促進しながら、支援を必要とする高齢者等に対し、地域ぐるみで安否確認や声かけなどを行う見守り体制の強化や生活支援を行うボランティアの育成に取り組み、子どもからお年寄りまでみんなで一緒に楽しむ元氣

村を目指して行きます。

―力を入れておられる取り組みや、特色のある取り組みについてお聞かせください

三島村も令和5年度から後期高齢者の健康維持やフレイル（心身の虚弱な状態）予防に努める新たな仕組みである「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施事業」を開始しています。少ないスタッフ体制ですが、役場の担当保健師が主体となり、各地区の診療所看護師、ヘルパー、介護予防支援専門員と連携を図りながら、現在、黒島の大里・片泊地区の2集落で事業を進めています。

本事業では、通いの場や訪問での基本チェックリストの実施、咀嚼ガムや水飲みテストでの口腔機能チェック、そして、言語聴覚士による個別相談などを実施しています。

移動手段の限られた小規模離島の三島村では、天候不良により海上が時化した場合など現地に専門講師が赴くことが出来ないケースもあります。インターネットを使ったWeb形式での指導を行うなど、工夫しながら取り組んでいます。概ね70歳以上の高齢者の8割が参加するなど、健康づくりに対する意識が高まってお

り、今後、村内全地区での展開を図る計画です。

村では、長年、住み慣れたところで安心して暮らせる地域づくりのために、概ね65歳以上の高齢者を対象に、生活支援型ホームヘルプサービス事業（介護保険外サービス）を行っています。安否確認や日常生活支援以外にも、高齢者にとつて最も身近な相談窓口としての機能や移動支援など、村内で高齢者が自立した生活を継続するうえで不可欠な役割を担っており、今後も事業を継続していきます。また、新たな取り組みとして、令



フレイル予防「口腔体操」の様子

和5年度から、企業版ふるさと納税の寄付金を財源として、自身で交通手段を持たず、移動に不自由を抱える村内の70歳以上の高齢者（介護保険事業で電動車いすの貸与を受けていない者）を対象にハンドル型電動車いすの貸出制度を開始しました。今後も、公共交通機関のない島での高齢者の外出機会や交流機会の確保による健康づくりと社会参加のため取り組みでいく計画です。

歴史に刻まれる一大公演 『三島村歌舞伎「俊寛」』

―村長ご自身の健康について、普段から心がけていらっしゃるごことがありましたらお聞かせください

自己の健康管理は、1つの仕事だと認識しています。その中でも一番気にかけていることは十分な睡眠をとることです。可能な限り8時間の睡眠をとるように心掛けており、1日のスケジュールの中で睡眠が確保できるように自己管理をしています。

また、食事と適度な運動も気にかけています。食事は、腹八分目を目標に、適度な運動ではウォーキングを行いながらバランスよく体重の維持管理を行っています。好きなお酒も最後

に「あと1杯、あと1杯」となるところをぐっと我慢し適度なお酒の量になるよう心がけています。

―最後に何か三島村のPRがございましたらお聞かせください

ユネスコ無形文化遺産の構成資産にもなっている「薩摩硫黄島のメンドン」、日本ジオパークに認定されている「三島村・鬼界カルデラジオパーク」、国指定天然記念物である「薩摩黒島の森林植物群落」、県内最大規模の「ミシマカップヨットレース」、焼酎特区の認定を受け公設公営で製造している



自然に囲まれた公設公営「みしま焼酎無垢の蔵」

「焼酎みしま村」、そして、村と深い絆で結ばれていた世界的な伝説のジャンベフォラ（西アフリカの伝統的な太鼓の名人）である故ママディ・ケイタさんの意志を受け継ぎ「みしまジャンベスクール」を拠点としたギニア共和国をはじめとする海外との交流など、地域の自然、文化、伝統芸能の保存・伝承や国内外に向けた南西諸島特有の文化の発信を行っています。

中でも、歌舞伎や能の演目として有名な「俊寛流刑」の伝説が伝わる薩摩硫黄島で、令和6年10月23日に『三島村歌舞伎「俊寛」』の上演が行われます。平成7年に行われた俊寛像の除幕式に招かれた中村勘九郎（故・中村勘三郎）が「この浜辺で俊寛を演じたい」と申し出たことから、平成8年に第1回目の中村屋による屋外歌舞伎「俊寛」が上演されました。以降、勘三郎の意向や再演を熱望する声もあり、平成23年には第2回目、そして、残念ながら『また15年後に孫と硫黄島で演じたい』という勘三郎の望みは叶いませんでしたが、その意思は引き継がれ、勘三郎の13回忌にあたる今年の公演が第3回目となります。

この公演は村にとっても歴史に刻まれる一大公演と捉え、役場内でプロ

ジェクトチームを組み着々と作業を進めています。

県内外の皆さんも、この機会にぜひ、三島村にお越しください。



(平成23年第2回目公演の様子)三島村歌舞伎「俊寛」